良寛の鍋蓋刻字「心月輪」の謎

金　沢　　篤

はじめに

良寛の墨蹟について考える時、＜文字通りの墨蹟＞と、＜墨蹟のいわば複製＞である詩碑、歌碑、句碑といった石碑などを区別して扱うべきなのではないか。良寛の場合、特にこの両者が往々にして混同されがちである。墨蹟は墨蹟、その複製は飽くまでも複製、その姿勢が大事なのではないか。＜複製＞には必ず＜原蹟＞があるはずであるが、＜複製＞だけがあって、＜原蹟＞が既に失われている場合が問題である。良寛の数ある墨蹟の中でも群を抜いて有名な、鍋蓋刻字「心月輪」を念頭において言うのである。だが、これは墨蹟の複製である。そしてあの解良家[1]ということで、その伝来は疑いようもないほどに明確であるにもかかわらず、その成立はまことに謎めいている。しかも＜複製＞に過ぎないその鍋蓋刻字「心月輪」に対しては、関係者や研究者や愛好家たちが口を揃えて「名品」と褒めそやしている。明らかに＜複製＞であるこの鍋蓋刻字「心月輪」を前にして、自分の感動の思いのたけを表明してはばからぬ御仁が跡を絶たないのである。思うに、これは、良寛の墨蹟、というよりは書人を超えた空間芸術家としての良寛の勝利と言うべきものである。円形の鍋蓋より月輪（満月）を想起し、そこから「心月輪」の三文字を捻り出し、その鍋蓋をキャンバスにしてその三文字を墨書する。白昼の満月はありえない。かりにあったとしても満月は識別できないであろう。ならば、満月は黒くなければならな

1　本攷においては良寛（＝栄蔵 1758 ～ 1830）と生前親交の厚かった解良叔問（1765 ～ 1819）を第 10 代目当主とする分水町の名家解良家について知っておく必要がある。『良寛禅師奇話』の著者として名高い第 13 代の栄重氏（～ 1859）、相馬御風初訪問の折の第 17 代の淳二郎氏（～ 1942）、名品鍋蓋刻字「心月輪」のイミテーション作りでも名高いベレー帽姿の第 18 代の順治氏（～？）、第 19 代の醇一氏（～ 1988）などが知られている。例えば大島花束［1958］の巻末などには、諸家系として良寛に関わりのある名家の家系図が掲載されている。解良家も第 18 代の順治氏（現主）までの記載がある（679 頁）。

い[2]。とすれば、その三文字は黒では有り得ない。白い胡粉で象形された刻字！

良寛の筆のタッチを体現する原蹟である墨蹟を犠牲にして出現した鍋蓋刻字「心月輪」を「名品」と褒めそやす人の気持ちも分からぬではない。闇空の中でこそ現れ出る満月を白昼（光の中で）見ようというのである。満月をはっきり観て、しかもその中に「心月輪」の三文字もはっきり見える必要がある。誰が差配したのか、今の鍋蓋刻字「心月輪」を出現させたその人の勝利だと思う。現代のわれわれはむしろその謎の人物を良寛の名で呼んでいるだけなのかも知れない。

渡辺秀英[1997]の次のような記述を見過ごしには出来ない。巻町角田浜の「木の間より」良寛歌碑に関してのもの。

「長谷川家には良寛の書いた法名の軸が位牌として仏壇に納められていた。

寛政四子六月十七日　道圓
寛政七卯六年廿六日　妙智
文化十二亥四月四日　寂照
文政三辰二月三日　　妙超

沙門良寛書

それで当主の次郎氏が、この法名軸を所蔵していることを門前に碑を建てて公示しておきたいとのことだった。

そうした布告をする目的なら、単に法名軸の事だけでなしに、角田浜を詠んだ良寛の歌を刻して良寛歌碑を建て、碑陰でこの法名軸を紹介したらよいだろう、と申し上げておいたところ、やがて実行に移されて、完成されたには驚いた[3]。」(23 頁)

2　だが、この黒い満月を黒い闇空の背景に見ようとしたものもある。『墨』十九号（芸術新聞社　1979.7）28 頁参照。なおそこには、「良寛が解良家を訪れたときに、台所の一隅に置き捨てられていた五升鍋のふたをみつけ、たちどころに即興で三字したためたと、言い伝えられる。意味は仏教観を表わす「正法眼蔵」や「寒山詩」の類語から、丸い鍋ぶたを見て良寛が咄嗟に考えたのであろう。古い鍋ぶたを芸術品に高める発想と手腕は良寛の人柄の一面を示している。」との無署名の説明が付されている。下線部は時に見かける文言であるが、わたしには「人柄の一面」とどう関わりがあるのか理解出来ない。

3　この「驚いた」は、助言を与えた当の渡辺氏の、良寛の墨蹟所蔵者の予想を超える情熱に対する「驚き」である。

渡辺秀英氏と＜長谷川家の当主次郎氏＞の関係もやや奇妙である。渡辺氏はいわゆる＜良寛事業＞（石碑）の専門家[4]、長谷川次郎氏は、＜良寛の墨蹟＞の所有者である。ここから窺われるのは、良寛の墨蹟を取り巻く越後地元の環境であり地元関係者の意識である。誰が始めたかは不明だが、良寛の墨蹟を所蔵する人物が、そのことを自慢げに外部に向けて告知する風習のあるのを見てとることが出来る。よく言えばみんながみな自分の所蔵する＜文化遺産＞である良寛の墨蹟を地元のみんなと共有し、共にその幸運を享受しようとする姿勢である。これは、他所ではあまり目にしない現象ではないだろうか[5]。

さて、鍋蓋刻字「心月輪」の成立についてであるが、宮榮二氏が誇張なく飾りげなく、

「解良家に伝わる有名な鍋蓋「心月輪」の刻字である。良寛が同家に寄寓中、桶屋が鍋蓋（五升鍋であろう）を作るのをみて、腕がむずむずして書いたもので、のちに刻字して扁額となし、その館を「心月亭」と称したという（玉木礼吉『良寛全集』）。／　相馬御風も大正六年、同家を訪れ、この鍋蓋をみて、『大愚良寛』にその感想を記しているが、詳細な由来は知り得なかった。当時すでに巷間に名物として知られていたが、遡ってくわしく来由を伝える記録はない。ただ現状からみて、新しい作り立ての板に記したものではない。たしかに古鍋蓋（あるいは古い敷板）であったと思われる。」（宮［1979］178 頁）

と穏当に記すところを出発点とすべきか。最後の下線部は宮氏の想像である。それが明確にわかるように書かれている。信頼に足る堅実な語り口と言うべきだろう。わたしの本攷はこの有名な鍋蓋刻字「心月輪」をめぐる狂騒ぶりに焦点を当てたもので、その逸話の真相を闡明し、併せ良寛の墨蹟研究の特異な問題点を浮き彫りに出来たらと念願する。

4　渡辺秀英氏は、『いしぶみ良寛』、渡辺［1972］を刊行し、その増補第 2 版、渡辺［1978］を刊行し、『良寛』誌第 2 号（1982 年秋季号）に「良寛いしぶみ巡り」の連載を開始し、さらに前著の増補第 3 版、渡辺［1985］を刊行した。そしてさらにその続編、『いしぶみ良寛 続』、渡辺［1997］を刊行した。いわば、良寛関連の石碑の権威である。

5　わたしは高校を卒業するまでを上越高田で過ごしたが、伊丹末雄［1976］の記すところからすると、そうした良寛の地元とは決して言えないわたしの地元の高田の旧家などにも相当数の良寛の遺墨が遺されているらしい。やはり土地柄の違いが大きいのだろう。

心月輪（鍋蓋刻字／木額）

今や日本全土を席巻するかの良寛事業、その最初のプロモーターと言うべき相馬御風は、わたしにとっては高校の大先輩でもある。御風は、その『大愚良寛』、相馬［1918］の中で、大正6年（1917年）7月14日解良家初訪問の折に解良家所蔵の「心月輪」の鍋蓋の現物を初めて見た時のことを、以下のように記している。

「次は額一面、これは良寛尊崇者の間に廣く知られた所謂名物の一つで、大きな古鍋蓋の裏に「心月輪」の三字を刻したもので、「良寛書」の三字も鮮やかに讀むことが出來た。書は云ふまでもなく良寛の特色を最もよく現したものであるが、私はそれよりも何故このやうな汚ならしい古鍋蓋を特に選んで額にしたかと云ふ事に興味を持つた。しかし、その事については何事をもつひに知る事が出來なかつた。」（414-415頁）

相馬御風は、その鍋蓋刻字「心月輪」のことを、「汚らしい古鍋蓋[6]」と表している（注意すべきは、有名な板の割れ目についての言及がないことかも知れない）[7]。そして、その成立の事情を所蔵者である解良淳二郎氏に尋ねたが、明確な説明は得られなかったのである。ということは、所蔵者の解良家の当主もそれが何であり、なぜそのようなものが自分の家にあるかを知らなかった、と考える他ない。解良淳二郎氏もその事情は知らされていなかったということである。良寛ゆかりの解良家にその奇妙な鍋蓋刻字「心月輪」が伝わっていることは関

6　御風のこの評言に注目したい。「心月輪」の意味を知ることのない者には「名品」といった評言も感動も無縁なのではないか。

7　中野孝次氏は中野［1997］の中で、この鍋蓋刻字「心月輪」について、「何よりもこの家のお宝は、床の間に置いてある鍋蓋に書いたという「心月輪」の書であろう。直径四二・四センチの鍋蓋に、今は地は黒く漆が塗られ、字だけが白く浮きだされている。三字の大小と位置のバランスがよく、これぞ名品中の名品と言っていい。わたしは跪いて見たが、これを見ただけでも解良家に来た甲斐があったと満足した。」（中野52頁）と記している。相馬［1918］の口絵の「心月輪」の写真には、明確に割れ目がある。これよりすると、言及はないものの、御風が最初に解良家で見た折の「心月輪」にも割れ目はあったと考えるべきか。この「今は地は黒く漆が塗られ」と伝える文献は他に見ない。古いから黒いのか、漆が塗られているから黒いのかは、とても重要な問題と思われるが、誰もその点を指摘しない。岡村圭真［1992］には「良寛の「心月輪」は、無造作に鍋蓋とおぼしき粗末な張りあわせの板に書かれている。とてものことに阿字観のように清浄無垢な月輪ではない。また慈雲の「阿字」の額のように、そのまま本尊としてまつられるようなものでもない。」（245頁）とある。

係者の間では知られているが、その由来は不明ということである。最初にこの鍋蓋刻字「心月輪」の成立の事情に公的に言及したのは小林存氏[8]のようである。小林存氏が大正２年に刊行した『彌彦神社附國上と良寛』の記述を通じて知られるとのことであるが、それを例えば谷川敏朗氏は、次のように記している。「さてある日のこと、良寛は解良家に泊まった。ちょうど桶屋が鍋蓋を作っていた。それを見ていて良寛は急に心が動き、直ちに筆を取って「心月輪」の三字を鍋蓋に書いた。これは大正二年小林存氏の著「弥彦神社附国上と良寛」にのせられた逸話である[9]。」（谷川［1975］226 頁）

また、谷川氏はさらに記述を継いで、「その後、解良家の下男が、庭でまき割りをしていた。そして使い古した鍋蓋を、まさに二つに割ろうとした時、良寛が可哀そうだと言って拾いあげ、「心月輪」の三文字を書いてやった。また

8 「良寛の逸話」を得意としているらしい谷川敏朗氏による小林存氏の『弥彦神社附国上と良寛』の名著紹介には、「著者は、中蒲原郡横越村における代々床屋職の家に生まれ、常民文化を唱えた民俗学者として名高い。また歌人でもあり、歌碑が県内には、いくつかある。それに、一部には奇人という風評も聞く。／　経歴はともかく、新潟県民俗学の先駆者であり、小林氏によってその学問は不動のものとなった。これと同じように、氏は良寛研究の嚆矢であり、本書によって良寛の人間性に関する考究は、飛躍的に進展した。」（『良寛』誌第 3 号 1983 年春号 66 頁）とある。また、同誌第 29 号には、やはり谷川敏朗氏による「奇人が奇僧によせた親愛の情―小林存」（90-93 頁）が掲載されている。「存」は「ながろう」と読む。相馬［1918］は、屡々小林［1913］に言及している、したがって、相馬御風は、相馬［1918］の刊行時には、その小林氏が伝える「心月輪」の逸話は承知していた筈である。むろん御風が初めて解良家を訪問し、初めてその鍋蓋刻字「心月論」を見た際に、そのエピソードを承知していたかは不明である。相馬［1918］の中には、小林［1913］が伝えるそのエピソードについては言及がない。なお相馬［1918］の中には、「更らに又『彌彦神社附國上と良寛』の著者小林粲樓氏は次の如く論じて居る。」（26 頁）等と出る。

9　解良家のこの鍋蓋刻字「心月輪」に関して、原田勘平氏は、小林存氏の伝える逸話を踏まえて、「ある秋の晴れた日に、良寛は解良家を訪ねました。折から大工が大きな鍋の蓋を削っていました。（五升鍋の蓋だったと伝えられています）之を見た良寛は、何となく其の板に文字が書いて見たくなって、大工から取り上げ、座敷にあがって、筆をとったのが此の「心輪月」［ママ］だったのです。・・・・・書風は懐素の千金帖（千字文）や自叙帖の筆意そのままで、字型もよく似ています。円い中に三字がまことによく配置されて居り、文字の大きさ、筆画の肥瘦がよく調和を保っています。落款の位置も適当な空間を埋めて而かもきゅうくつでなく、どっしりと落ちついて居ます。晩年の作品ではありませんが、相当に円熟して油の乗った頃のものだろうと思われます。」（原田［1974］326-327 頁）と記している。

腹をすかせて同家を訪れた良寛が、台所へ行った折、雑炊が煮えてあった。その大きな鍋のふたを見て、急に一筆書きたくなって筆を振った。更に桶屋の作りかけた鍋蓋にさけ目が入ってしまった。しかたなしに割ってまきにしようとしたのを見て、良寛が気の毒に思い、書いてやったと、種々の逸話が語られて来た。」（谷川［1975］226-227 頁）とする[10]。下線を付した谷川氏の「その後、」は、小林存氏のその著作が刊行された大正 2 年以後、という意味だろうが、「その後」「また」「更に」と別の「種々の逸話が」現れたと言いたかったのであろう。大正 6 年に相馬御風が初めて解良家を訪れて、その鍋蓋刻字を見た時には、小林存氏によるその逸話もまだ御風の耳には届いていなかったと見える。その後の種々の逸話を紹介している谷川氏だが、別の「種々の逸話」には典拠を示すことをしていない。真実を目指している研究者としてはまったく困ったものである。逸話というものは、一度その雛型が発出せられるや、たちどころに増殖してゆくもののようだ。谷川氏は、これらの別の「種々の逸話」には典拠は示すことをしていない。谷川氏はおそらく、毎日新聞新潟支局［1972］に、「ナベぶたの書のいわれについてはいろいろな説がある。相馬御風はその著『大愚良

10　谷川氏は、谷川［1984］では、「ついでながら、解良家に関する逸話を拾ってみると、同家に「心月輪」と書いた大きな鍋蓋が保存されている。これには同家に泊まった良寛が、ちょうど桶屋の作っている鍋蓋を見て、急に心を動かし直ちに筆を取って書いたとか、同家の下男が使い古しの鍋蓋を二つに割ろうとしていた、割られる鍋蓋に哀れみを覚えた良寛が、それを拾い上げて字を書いた。また、空腹をかかえて同家を訪れた良寛が台所へ行ったところ、雑炊が煮えていた。その大きな鍋のふたを見て急に心が動き、筆を走らせたとかいう。／　しかし、使い古したものに書いたのではないであろう。遺品にはふたの取っ手をつけるみぞがなく、それに古びて黒ずんだ物に墨で字を書いて見栄えがしたかどうか疑問である。やはり一番古い言い伝えであるところの、まだみぞも作ってない新しい鍋蓋用の木にさけ目が出来た。それを哀れみ、良寛が筆を揮ったというのが真実に近い。このさけ目は、みぞを彫るために最初にあてたのみで出来たものである。」と記している。さらに典拠の不明なやりきれない記述だが、下線を付した「やはり一番古い言い伝えであるところの、」新しい情報が記されているようなのだが、それも何一つ典拠が示されていないのである。「一番古い言い伝え」とは何を根拠にしたものだろう。そして谷川氏が「真実に近い」とする説だが、さけ目の入った新しい鍋蓋用の円形の板に、良寛自身が墨書した結果が、今日解良家に伝わるさけ目の入った「心月輪」の鍋蓋刻字となっているというのは不思議な気がする。さけ目は、渡辺秀英氏が記す如く、「「輪」の最初の点と「月」の起筆にかけて」（渡辺［1996］212 頁）入っているのである。鍋蓋のその「さけ目」は、少なくとも良寛が墨書した後に、生じたものであることだけは確かなことである。

寛』の中で、／「解良家の下男が庭でマキ割りをしていた。使い古したナベぶたを真っ二つに割ろうとしたとき、良寛が“かわいそう”と拾いあげ、心月輪の三文字を書いた」／　と述べているのも一説。」（132 頁）とあるのを踏まえているのではないか。だが、相馬御風の『大愚良寛』には、そのような記述は一切ないのである。「良寛研究者」を名乗る谷川氏はそうした逸話の裏をとったのだろうか。谷川氏が紹介している次の説も、おそらく典拠は毎日新聞新潟支局［1972］。そこには、「これに対し、解良家に伝わる“いわれ”には、／「良寛が解良家を訪れ、おなかをすかせて台所へ行ったら、雑炊をたいてあった大きなナベがあり、ふと一筆したためたくなって書いた」／　とあり、御風の説とは別である。」（132 頁）とある。御風が 1917 年 7 月に解良家を訪問した折には示されなかった「いわれ」である。やはり逸話は、増殖されるのではないか。典拠を常に示すという態度が厳格に維持されないと、ふしだらな個人的想像が「逸話」となって次から次へと一人歩きを始めるようだ[11]。加藤僖一氏が典拠を示さずにしばしば口にする「厳密には鍋敷きのようであるが、もうナベブタで通っている。」（加藤［1984］235 頁）なども、毎日新聞新潟支局［1972］に、「さらに［解良］順治さんは、「よく観察、研究してみたら、どうもナベぶたではなく、ナベ敷きのようです」／　と新説を披露。ナベぶたにしては取っ手がないし、裏にナベを置いたような黒いコゲあとがある―というのが新説の根拠である。・・・もっとも順治さんは、自説にはこだわらないようす。／「ナベぶたと伝えられてきたんだから、そうしておきましょう。ナベ敷きの書より、ナベぶたの書の方が聞こえがいいし」」（132 頁）を踏まえていることは明らかである。加藤氏の「ナベブタに書かれた書として有名な作品。厳密には鍋敷きのようであるが、やはりナベブタの方が風流でよい。」（加藤［1979b］106 頁）

11　良寛の逸話については、宮榮二氏の「文献や遺物が事実を伝える直接史料とすれば、逸話は真実を語る間接史料といいうる。間接とは、客観性が稀薄で、虚構のための虚構ではなくて、話中の真実を鮮明に映さんがための細工であるのが特長である。／　だから逸話から真実を拾い出すためには、できるだけ原石である逸話を打ち砕き、玉石をふるいにかける必要がある。／　良寛の逸話は二百二十余を数えるが、その中明治以前からのものは、『奇話』の五十六項を含む七十数項であり、数は全体の三十数％にすぎないが、良寛の人間性を伝える珠玉の話が多い。明治以後になると、実証的研究が盛んになって、かえって逸話は単に奇行奇癖を誇張して伝えるだけのものであったり、また採集地や伝承者、話者すら不明のものが多い。」（宮［1979a］4 頁）が貴重である。

を見たりすると、解良順治氏の全くの受け売りのようで、片腹痛しである。「ナベブタの方が風流でよい」とは何という言いぐさだろうか。これが研究者の態度というものだろうか。「厳密には鍋敷き」が真実であるならば、「鍋蓋」とする「種々の逸話」はすべて虚偽である。研究者を名乗る加藤僖一氏は真実などどうでもよいと鷹揚な態度である。加藤氏もまた良寛事業のプロモーターなのであろう[12]。

相馬御風は、『大愚良寛』を刊行した十年後に刊行した『良寛坊物語』、相馬［1928］の中で、次のような物語を紡いでいる。『大愚良寛』では、鍋蓋刻字「心月輪」の成立の事情を知ることのなかった相馬御風が、その成立の事情を「物語風に」初めて伝えた、良寛研究史の中でもかなり初期の記述であるから、やや長くはあるが、紹介してみよう。

「解良家は此地方での豪族であり舊家でした。當主の木惣左衛門は號を叔問といつて詩歌を好み、良寛さまとは殊の外よく氣が合ひました。單に氣が合つたといふ以上に、叔問はじめ解良家の人達は良寛さまを生佛かなどのやうに崇敬してゐました。良寛さまが見えても、未だ曾て一度も佛法を談じたり道を説いたりするやうなことはありませんでしたが、良寛さまがその家にゐる間は、春風春水一時に到るといふやうに何とも云ひやうのない溫かな平和の氣が家内に漲つてゐるのでした。／　そんな風でしたから、良寛さまが見えると解良家の人達は下男下女の果までも、非常に歡んで迎へました。そして「何はともあれ、先づ一風呂お浴びなされ。」といつてわざわざ湯を立てゝくれたりしました。／　と、良寛さまが風呂に入つてゐたすぐそばの土間に仕事をしてゐた大工が、何を思つたか、／「チエッ！　面白うもない。」／と云ひさま一枚の新らしい大きな鍋蓋を土間に投げ出しました。／　良寛さまは驚いて風呂の中から聲をかけました。／「おい、喜作さ、そりや一體どうしたといふもんだえ。折角自

12　それにつけても今更のように思い出されるのは、以下の言葉から窺われる宮榮二氏の清々しい姿勢である。宮［1983］の「自序」の「このことを、師と同じ郷土の後人として、いかにして語り伝えて行ったらよいか。／　師の真骨頂など、到底説くことはできない。その試みは、かえって己れの虚しさ、浅はかさを語るだけであろう。郷土人として出来ることは、ただ師の直接史料――あの村、この町に埋没散在する無数の遺墨を自分の五躰で捜しもとめ、確認することである。そこから得られた真実を忠実に記録して世に伝えることこそ、この地に生を送る者の責務であると筆者は考えている。」（2 頁）

分の手で骨を折つて拵へた物を投げつけるなんて‥‥‥」／「なに、お前さま、折角拵へ上げたと思ふと、パキンとヒビがはいりましたんだがのし。」／と大工は答へました。／　いかにも大工の云ふ通り、見るとその鍋蓋には大きなヒビが入つてゐるのでした。しかしいかに何でも折角これまでに仕上げた物をむざゝゞ捨ててしまふのは惜くてならないので、良寛さまはそれを貰ひうけることにしました。そして云ひました。／「のう、喜作さ、折角お前さまもこれまで骨を折つたんだでの、わしは一つお前さまの骨折を無駄にせんやうに、これに一つ位をつけてやらうわい。」／　やがて良寛さまは風呂から出ると、早速その鍋蓋に「心月輪」といふ大きな字を三つ横に書きました。／そして自分でも手を拍つて喜びながら、／「どうだい、喜作さ、これなら立派な額にならうがの。」／「さやうでござります。勿體ない。」大工はかういつて涙を流して喜びました[13]。／　が、それを見るともなく見て居た主人の叔問は、あわてゝ飛び出して來て、是非それを自分に貰ひ受けるやうにと頼みました。けれども良寛さまはどうしてもいやだと云ひました。／「これはわしは喜作さにやるつもりで書きましたのぢや。どうか喜作さにやつておくんなさい。」かう良寛さまは事をわけてことわりました。／「それはさうか知れませんが、喜作の方へはわしから又何とかしますゝけ、これは是非わたしの家の寶にさせて置いてくんなさい。人の働きおろそかにしてはならんぞといふ誡めにもなりますし、又物は使ひやうでどんなにでも役に立つもんだ、このやうな出來損ひの物でも拾ひ上げなさつたお方のおかげでこのやうに貴いものになつたではないかといふやうな手本にもなりますし‥‥‥」叔問はこんな風に勿體をつけてなほも頼むのでした。／　良寛さまは困つてしまひました。／「いや、どうもさう勿體をつけられては、わしの方が却てきまり悪うなります。わしは決してそのやうなつもりで書いたのではありません。のう喜作さ。」／　かうなると大工の方が却て恐縮しなくてはならないのでした。／「いや、いや。わしが一番悪いがんでござります。ほんの一時の癇癪から折角これまで拵へ上げた物を投げつけたりなんかしましてほんに済まんことをしました。それに何ひと言お叱りもなさらん

13　御風の紡ぎ出した逸話の空疎な点は、大工や叔問の感動が単に人気の良寛の墨蹟を一つ得ることになったことに解消されてしまう点であろう。叔問はともかくとして、「大工の喜作さ」が、直ちに鍋蓋「心月輪」の意味を理解したとは考えられないのである。御風でさえ、果たしてその意味を理解していたかどうか。

で、却てこのやうな‥‥‥」かう云つて喜作は今にも泣き出しさうな表情をしながら、手をついて頭を下げました。／　良寛さまはますゝゝてれてしまひました。／「いやもうかうなつちやわしはいつち困る。どうかもうそのやうなことは云はんでくんさい。當分字は書かんと此の間かたく心をきめて置きながら、又してもこのやうな出過ぎたことをしてしまひましたわい。」／　かうして一枚の鍋蓋を中にして三すくみのやうな妙な場面がそこに演じ出されたのでした。が、結局鍋蓋は解良家に保存されることになり、大工の勞力は仕事の結果が失敗に終つたのであるにも拘らず相當以上に報ひられました。／　たゞ良寛さまだけは又しても餘計な出しやばりをしてしまつたといふやうな済まない氣持に悩まされずにはゐられませんでした。」（177-182 頁）

いかが。御風が、この物語を何を根拠に展開したかは不明である。どこからどこまでが伝承でどこからどこまでが御風のフィクションかは不明である。「物語風に良寛和尚の生活を描いて見たいといふ念願」を持っていた御風は、「此の物語の大體は史實と口碑とに依つたものですが、かなり多くの想像をも加へて書きました。これを以て良寛和尚の正傳だなどゝ思つてくださらぬやうに希望いたします[14]。」（緒言 1-3 頁）と記している。御風にとって「史實と口碑」とは何だったのだろう。わたしは、下線を引いた事実と、「心月輪」にまつわる玉木［1918］と小林［1913］が伝える逸話を踏まえて、編み出された御風の自由な想像の産物であろう、と考えたい。それにしても御風の物語の何と稚拙なことか、先年筆者が論じた良寛の長歌「月の兎」といい、御風の良寛理解の通俗性が鼻につくような陳腐な教訓物語と言うべきであろう。せめて良寛の語る地元言葉が糸魚川出身の御風によって的確に捉えられていることを願う。また、その物語に鍋蓋の「さけ目」が明確に登場することは、御風が最初に目にした鍋蓋にも、その「さけ目」があったことを証していると考えるべきなのだろうか。さらにまた、「さけ目」があるということと、鍋蓋が二つに割れたということは別のことと考えるべきなのだろうか。だが、「さけ目」ないし「割れ目」の上に良寛は筆を奮って「心月輪」と書きつけたのだろうか。古い鍋蓋

14　御風のこの記述を踏まえて加藤僖一氏はあっけらかんと「原著者［＝相馬御風：筆者註記］の希望にもかかわらず、その後の本がほとんど史実か正伝と解釈し、むしろ尾ひれがついて拡大してゆく一方である。」（194 頁）と記している。事業であるから、何にせよ増大・繁栄は歓迎と言わんばかりである。

ではあれ、鍋蓋の表面ないし裏面は平らかであればこそ、伎癢禁じ得ずして、満月状のその円板に「心月輪」と書きつけたと考えるのが自然であるようにも思えるのである。

御風は、さらにその二年後の相馬［1930］の中でも「鍋蓋の額」の題名の下で以下のように記している。

「越後西蒲原郡牧ヶ花村の解良といふ家に、大きな鍋の蓋に「心月輪」といふ良寛さまの書いた字を彫つた額が、今でもかけてあります。その鍋蓋には大きなひびが入つて居り、たいそう古びてまつくろになつてゐます。

それは或時良寛さまがその家に行つた時に、破れて使へなくなつた木の鍋蓋を見て、それをそのまゝ捨てゝしまふのがもつたいないと思ひ、

「鍋蓋として使へなくなつたとて、このまゝ捨てゝしまふのはかわいさうだ。これでもこしらへるには、どんなに骨が折れたことかわからぬ。どりやゝゝゝ、わしは一つこの鍋蓋を出世させてやらう。位を高くしてやるのぢや。」

かういつて良寛さまは、そのこわれた鍋の蓋に「心月輪

といふ字を書き、「良寛書」と自分の名まで添へてやりました。

さうなると、その家の人達は、それを捨てるどころか、「これこそ家の寶だ」といふので、良寛さまの書いた字を彫りつけて、そのまゝ額として壁の上にかけることにしたのでした。

つまり良寛さまの徳のおかげで、その破れた鍋の蓋が、捨てられて薪の代りにでもされる代りに、家の寶にまで出世したのでした。」（相馬［1930］61-63 頁）

いかが。ここには「大工の喜作さ」も、解良叔問、良寛、大工の喜作の間に繰り広げられる茶番劇もない。わたしはどうしても相馬御風の描くこうした良寛像には共感できないのである。「良寛さまの徳のおかげで」「家の寶にまで出世した」ことを「その破れた鍋の蓋が」喜んでいるようには思われないのである。この場合の「良寛さまの徳」とは何のことだろう。ものを大切に思い大切に扱う気持ちのことだろうか。「一つ位をつけてやらう」「出世させてやらう」「位を高くしてやるのぢや」といった意識ほど、曹洞宗の僧侶としての修行を経てきた書人良寛に似つかわしくないものはないと思われる[15]。それにつけても、良

15　だが、御風の良寛観に共感し、御風を高く評価して『良寛と相馬御風』、加藤［1979a］を刊行した加藤僖一氏は同書中で、「良寛を論じながら、御風自身の告白と二重うつしに感じられる面が多い。私はこの二人が性格的に非常に似ているように思われる。御風流

寛の書の愛好家のうちには鑑賞しているだけでは済まずに、自身も筆をとって進んで書を書きたがる御仁も跡を絶たないようである[16]。

通常、「鍋蓋刻字「心月輪」成立の典拠」とされるのは、最初の『良寛全集』、玉木［1918］の刊行者、玉木禮吉氏が、「逸話」として同全集の中に伝える以下のものである[17]。すなわち、本論冒頭で宮［1979］の記述を紹介したが、その宮榮二氏が典拠としたところのものである。

「○禪師曾て牧ヶ花村の解良家に寓し、一日桶工の鍋蓋を作るを見て伎癢禁ぜず、直ちに筆を執りて心月輪の三字を揮ひしに、字字飛動せり、後同家には之

にいうならば「良寛も尊い。御風も尊い。」と私はいいたいのである。」（196 頁）とまで言うのである。さらに「良寛について数多く伝えられている口碑について「おそらくそのいずれも真であろう。おそらく又そのいずれも真ではなかろう。」と述べているのは、御風翁の研究態度というか、姿勢を知る上で重要なカギのように思われる。一見精密な学問的校定というより、大雑把な文学的なとらえ方のように見えて、真でもあり、真でもないという、もう一つ高い段階でとらえているのである。一つの誤りも許さない対決の仕方もあれば、たくさんの誤りを含んだまま大きくとらえる対決の仕方もあるであろう。」（186 頁）とまで言うのである。驚くばかりだ。

16「宮榮二先生追悼号」となった『良寛』誌に、加藤僖一氏が珍しく宮氏について書いているので紹介しておきたい。「昨年の春であったか、一昨年の秋であったか、ショボショボと雨の降る夜、近藤敬四郎氏から突然電話がかかり、これから出かけて来い、とのこと。何とかいう飲み屋へ行ったら、近藤敬四郎、宮榮二、高見正二、平吉平の各氏がおられ、かなりメートルがあがっている様子。／　どういう話のなりゆきだったか、近藤氏が、宮氏と私にむかって「握手をせい」といわれた。何で握手をしなければならないのかわからぬまま、私の方にこばむ理由はないので、手をさし出した。宮氏は、少し顔をしかめるようにして、手を出された。これが最初にして最後、たった一度の宮氏との握手であった。／　その時、宮氏は近藤氏に「あんなヘタクソな字（読みにくい字、だったかもしれない）は書くもんじゃない」と言われた。ある展覧会に出品の近藤氏の書幅を指しての話である。近藤氏は「加藤さんがほめてくれてんのに、お前がけなす法があるか。たとえ冗談でも、言っていいことと、悪いこととあるもんだ」といって、珍しく語気を強められた。」（加藤［1987］43 頁）近藤敬四郎氏は、良寛事業の発願者である佐藤吉太郎耐雪翁の女婿で、『良寛』誌などの母胎となる全国良寛会の会長。『良寛』誌第 20 号（1991 年秋号）は、「全国良寛会・近藤敬四郎会長追悼号」となった。

17　この鍋蓋刻字「心月輪」の成立をめぐる逸話に関しては、小島［1987］の「良寛の書に關する逸話」が参考になろう。玉木［1918］のこの逸話は、小林存著『彌彦神社附國上と良寛』（萬松堂支店 1913）にもあるとのことである。小島［1987］190 頁参照のこと。

を彫りて扁額となし亭を心月亭と稱す、明治に至り智山派の僧權田雷斧[18]之を極愛し、出雲崎の工人某をして摸造せしめ、其僧園に扁す、三浦觀樹將軍之を見て垂涎し終に權田氏に懇望して其書齋に掲げられたりと云ふ。」（玉木［1918］283 頁）

こうした事情は、御風に対面した当の解良家の当主淳二郎氏も知らなかったものであると想像される。わたしは、横着して、先の小林存氏の著作を直に見ていないが、小島［1987］には、「良寛の書に關する逸話」として、問題の鍋蓋刻字「心月輪」については、玉木［1918］の先の逸話と共に、小林［1913］の逸話が、以下のように掲げられている。

「○良寛曾て牧ヶ花の解良氏に寓し一日桶工の鍋蓋を作るを以て伎癢禁ぜず、直に筆を採りて心月輪の三字を揮毫せしに、字々皆飛動せり、後之を彫りて額とし亭を心月亭と稱するに至る、明治に至り天臺宗智山派の大僧正權田雷斧之を極愛し、出雲崎の工人某をして之を寫さしめ其僧園に標示す、然るに三浦梧樓將軍一見して垂涎の感あり、終に權田氏より奪ふて自家の書室に掲ぐといふ、また佳話也。（存）」（小島［1987］190 頁）

このほぼ同時期に発表された「心月輪」をめぐる二つの逸話は、若干の語句の違い[19]はあるものの、ほぼ同一のものである。そこには、＜鍋蓋のさけ目＞についての言及がない。良寛が、解良家で、製造中の鍋蓋を見て「伎癢禁ぜず」（「伎癢」ぎよう・他人のするのを見て腕がむずむずすること。自分の技倆を示したくてもどかしく思うこと。『広辞苑』による。筆者註記）、筆を執って書き

18　思いがけず、ここに權田雷斧の名前を見出したのである。わたしもかつて一度、近代日本に於ける「因明学（論理学）」の歴史について論じた論攷の中で、この權田雷斧について触れた気がする。実は、この權田雷斧師は、以下の相馬御風の随筆「良寛遺跡巡り」に、以下のように記述される通り、良寛と同郷の出雲崎の人である。

「それから佐藤氏は話をつゞけて、出雲崎と云ふところは良寛をはじめとして古來名僧を多く出した土地だと云ふことを語り、良寛當時前後に於て出た人だけでも、釋大忍、長生院智現、開德院法賢、欣淨院了實等の數四を擧げることが出來ると云ひ、更に明治に於ては小林日堇の如き權田雷斧の如きがあることをも言ひ添へられた。」（相馬［1942］377 頁）

19　小林［1913］に、「天臺宗智山派の大僧正」とあるのは、誤りか。西越郷土誌編纂會［1926］によれば、權田雷斧は、「新義真言宗随一の碩学」「新義真言宗豊山派管長となり」「豊山大學長となり」（237 頁）とある。「三浦觀樹」＝「三浦梧楼」。なお、三浦觀樹将軍に関しては、伊藤［1935］145-170 頁などを参照のこと。

つけた、後に［解良家で、］それを刻字して、木額として［家宝］とした、ということのようである。谷川氏が、「種々の逸話」として紹介しているものは、この小林、玉木両氏が公にした逸話の「雛型」を基に、いわば現代の書き手たちが、思い思いに付加・捏造・創作した、「新たな逸話」なのではないか。

つまり、「鍋蓋ではなく、実は鍋敷である」「出来たての新しい鍋蓋ではなく、古い鍋蓋である」「鍋蓋製造中のミスでさけ目が入ってしまって不良鍋蓋として廃棄処分となるのを哀れに思った良寛が墨書することによって救った」との種々の逸話である。神話の創造、ならぬ逸話の創造。

谷川氏は、先の記述に続けて、以下のように、自説を展開させている。

「しかし使い古したふたに書いたものではあるまい。取っ手がなくなったとしても、みぞは刻ってあったはずだ。だが現物にはみぞがない。それに古びて黒ずんだ所に、墨で書いた字が見栄えがしたかどうか疑問だ。また新しい鍋蓋を桶屋から取り上げて、良寛が勝手に字を書いたとするのにも疑いがある。やはり何かの拍子に、作りかけの蓋にさけ目が入ったのであろう。捨ててしまうと言われて、良寛が桶屋の徒労を哀れみ、廃物に命を与えてやったとするのが真に近いようだ。現実に、蓋にはさけ目があり、修復のあとがある。また昔はいろりで木を燃した。その為何もかもすすけてしまう。この鍋蓋も飾られている内に、時代色がついて黒くなったと思われる。」（谷川［1975］227 頁）

いかが。谷川氏の思弁も加藤氏のノーテンキ発言と似たりよったりという印象である。現物を手に取ったことも見たこともないわたしには、こうした想像に付加する何ものも持たない。問題にすべきは、そんなことでも、＜「心月輪」を何と読むか＞でもなく、解良家に現存するその鍋蓋「心月輪」によって、良寛自身が手にとって墨書したと言われるオリジナルの鍋蓋「心月輪」が消されて失われてしまったということではないか。良寛が書き付けた文字の上から刻字した結果、良寛の＜真の墨蹟＞が永遠に失われてしまったことだと思う。＜真の墨蹟＞の複製に過ぎない鍋蓋刻字「心月輪」が素晴らしいものだとすれば、永遠に失われてしまった＜真の墨蹟＞は、もっと遙かに素晴らしかっただろうに、という思いを禁じ得ないのである。谷川氏は、そのエッセイを、「それにしても良寛は難しい。逸話は多く作られるし、作品も哲学を蔵していて、解釈が幾つにもわかれる。良寛はそれだけに偉大な人物と言えるのであろう。」（谷川［1975］232 頁）と結んでいる。笑止、笑止、万事がこうである。良寛の愛好家で良寛の紹介･普及に勉めている人々、こういう人々のことをわたしは「良

寛事業のプロモーター」と呼んでいるのだが、彼らの常套的な落ちの付け方である。

「心月輪」についての「書道の専門家らしい」加藤僖一氏の珍妙な鑑賞をうかがってみたい[20]。

「「心」の最終画の点は、かなり高い位置に打たれている。この一字だけで見ると、調和をやぶるほどである。しかし三字全体の構成では、この位置は引首印（作品の右肩に押す遊印）のそれにあたる。「月」は本作の主題。いかにもふくよかな、大らかな結体である。「輪」では旁の長い横画を、突然右下がりに書いたのに驚かされる。常識的には「月」の横画とほぼ同様に、右肩上がりに書くべきであろう。「心」も「月」もかなり右肩上がりに書かれているので、自然に調和がとれる筈である。しかし良寛は、平凡な調和より、破調の調和をとった。「心月」の右斜め上方への動きと「輪」の左斜め上方への動きとによって、作品に浮揚力が生じ、かつスケールを非常に大きくしている。この三字の組合わせの妙は、実に無限だといえよう。良寛はどんな小さな木片や紙片でも、たちまち神や仏にかえてしまうのである。」（加藤［1984］225 頁）

よくも言ったり。加藤氏の手にかかれば、良寛の評価はうなぎ登り、天井知らずである。氏の著作の奥付の著者プロフィールにしばしば出る氏の住所からすると、わたしが上越高田の自宅から新潟大学の高田分校近くの中学や高校に通っていたころ、自転車に乗ったら 10 分もかからぬ所に、この加藤僖一氏は住んでいたらしい。幸か不幸かは知らないが、そのころわたしの頭の中には良寛のことなど微塵も存在しなかった、と思う。

また、栗田勇［2005］には、「心月輪」について以下のようにある。

「資料館に、直径四十センチほどの黒くすすけた、なべぶたがある[21]。割れ目が入っている。この円いふたいっぱいに「心」「月」「輪」という三文字が書かれ、左横に小さく「良寛書」とある。浅く彫って白く胡粉で埋めてある。何とも言いようのない不思議なものだ。

20　加藤［2005］39 頁参照。

21　栗田氏が資料館で見て「木蓋の存在感に打たれ」た「黒くすすけた、なべぶた」は「本物」ではなく、いわゆるレプリカであったことが知れる。資料館に展示されているのは「本物」ではなく、「偽物」ということだろうか。どうせ観覧者には「本物」と「偽物」の区別がつかないのだから、「偽物」で十分ということだろうか。観覧者のうちの選ばれた者（コネのある者）だけが、「本物」を見ることが許されるということだろうか。

私はこの木蓋の存在感に打たれ、ぜひ本物を見たいと思った。はじめて良寛の跡を巡礼しはじめた昭和六十三年の頃であった。前夜に泊まった岩室温泉の宿の女主人が、たまたま、解良家の当主が高校の教師をされていた時の教え子だということが分かって、当時、実物を保存されていた解良家で手にとって拝見できるということになった。

解良家のご当主は、同窓会のお帰りだということで、一杯機嫌で「何をご覧になりたいのですか」と問われた。

近頃では良寛の遺物はよく管理されて、やたらに手にとってみることは難しいだろう。

「さあこれですよ」と奥から出していただいた。なべぶた風の円板はずしりと重く、木目の手触りが不思議な存在感を伝えてくれる。この板を良寛その人が手に触れ筆を走らせたかと思うと、良寛の熱いときめきを感じる。良寛は気が満ちると素材を選ばず、どんな紙片にも筆を走らせているが、円板に書かれたものは他にはない。

こういう逸話がある。ある日、良寛が解良家を訪れると、大工が大きななべぶたを作っていた。さて取っ手をはめ込む溝を彫ろうとしかけた時、板に裂け目が入ってしまった。ガックリしている大工に良寛が、その板を生かしてあげようと言って、その場で「心月輪」と書いたという。

言い伝えはともあれ、丸いなべぶたの白木の板を見た時、良寛は心が躍った。削った円板は満月を思わせる。仏法では真如の月とも言われ、真理そのものとされる。良寛はそこに仏の姿を見た。」（391-392 頁）

この栗田勇氏は何の専門家か不明だが、やはり谷川氏や加藤氏と同様の良寛事業のプロモーターのお一人のようだ。

同じく谷川［1985］には、「心月輪」の石碑[22]についての「さて、分水路に掛

22　この石碑については、渡辺［1985］の中にも「62　心月輪の碑」として紹介されている。それによれば碑陰には、「解良家で作りかけの鍋蓋を目にした良寛は、円い素材にちなんで「心月輪」の三文字を書いた。心月輪とは菩提心悟りを求めて修行する心とも言われている。良寛芸術の最高傑作の一つにかぞえられている。」（221 頁）と刻まれているようだ。渡辺氏は、その「心月輪」を解説するに、『真言宗聖典』に依拠して「要点をあげ」た後、「右のように見てくると、鍋蓋の円は、ただの円型だけでなしに三千界も大宇宙が考えられているのでなかろうか。だが経文が本来考えていたものを、心も月も輪も、また鍋蓋もすべて円くあるところに人も世間もよく治まると解するのも、それぞれに応

かる新大河津橋を渡り切ると、東側たもとに、大河津橋記念公園がある。その一角に、輪の中へ「心月輪　良寛書」と書いた石碑が建っている。原本は鍋蓋で、分水町牧が花の解良家所蔵のものである。」（106 頁）といった記述の他に、解良家についての以下のような紹介がある。

「同家には、鍋蓋に「心月輪」と書いたものがある。良寛が同家を訪れた時、大工が大きな鍋蓋を作っていた。ところが、取手をはめ込む溝を彫る時、うっかりして裂け目を入れてしまった。がっかりしている大工を見て良寛は「その板を活かしてやろう」と言って字を書いてくれたものという。現物には二つの取手がつく予定だったのだろう、中央より上の方に、溝を彫るために鑿を当てた跡がある。そこから裂け目がついている。溝は木目と直角に入れるべきなのだが、木目に沿って鑿が当てられている。その方が彫りやすいわけだが、失敗しやすい。それを知らなかったのだから、大工はまだ子供か若者だったのだろう。そこで良寛もなおのこと、憐れみを覚えて字を書いたのであろう。／「心月輪」は「しんがつりん」か、あるいは「しんがちりん」と読み、悟りに入るための法具、円い鏡といってもよい。真言密教によく用い、悟りの心でもある。／　三升炊きの大きな鍋蓋なので、良寛は見た瞬間に「心月輪」を思い浮かべたものか。解良家では、用途にちなんで、台所の梁の下に長い間飾っておかれたという。」（141-143 頁）

いかが。もう谷川氏も好き放題である。種々の逸話を紹介する段階から大きく一歩踏み出している。おそらく原田勘平氏の「五升炊き[23]」を踏まえて、「五升炊き」とした宮氏に対抗して、「五升炊き」ではない「三升炊き」、としてしまっている。話も、御風が『良寛坊物語』ででっちあげた話を採用して一つの「これっきゃない」逸話を触れ回っている感じである。誰も彼もが良寛を山車にして繰り返し繰り返し本に仕立てている。それほどに良寛本は売れるのか。

良寛の墨蹟の複製である鍋蓋刻字「心月輪」の紛れもない複製であるレプリカが資料館に展示され、公園には、やはり複製の複製と言うべき「石碑」までもが立っているのである。複製こそが良寛事業の中核である。

じた解釈でもあろう。仏教三千年の宗派の歴史も、「心月輪」をめぐる聚訟のうちに具現されているようだ。」（221 頁）と記している。わたしの朦朧とした頭では解読不能であった。渡辺氏は何を言いたいのであろう。後で触れるように、渡辺氏は、渡辺［1996］でも「心月輪」について語っている。（212-215 頁）

23　本攷脚註 8 を参照のこと。

加藤［1999］には、「そこで標題にかかげましたように「心月輪と白扇讃」といたしました。これは言いかえれば解良家と阿部家ということにもなります。／　どちらも個人のお宅ですので、皆さんにはなかなか見学される機会がむつかしいのではないかと思われましたので、阿部家の方を今ほどビデオでご覧いただきました。」（4 頁）とある。加藤氏は、「皆さん」には、難しいけど、わたしには難しくなかったので、その折に撮影してきたビデオをお見せします、と言いたかったのだろう。驚くばかりの加藤氏の発言である。

この鍋蓋刻字「心月輪」に関しては、毎日新聞新潟支局［1972］は、さらに貴重な情報を与えてくれる。同書が、かなり早い時期に刊行されたものにも拘わらず、後続のごまんとある類似書には、名前を挙げて言及されることがほとんどないことを考え合わせて、敢えて、それを紹介しておこう。同書「よき理解者」章中の「解良叔問」の項の「ナベぶたの不思議　良寛が解良家に残した遺墨の中で、一番有名なのがナベぶたの「心月輪」。良寛の遺墨展が開かれると、必ずといっていいほどこのナベぶたが展示され、良寛記念館などの施設、みやげ物店にはナベぶたのイミテーションが売られている。“本物”の所有者、解良順治さんも、趣味でイミテーションづくりをしている一人である。」（131 頁）と始まる部分。そこには、ベレー帽を被って「心月輪」の「本物」と「イミテーション」を抱きかかえて座す解良順治氏の写真が掲載されているのである[24]。「みやげ物」として売られているのが、解良順治氏の製作したイミテーションかどうかは不明だが、「複製」を作るのは、「本物」の所有者の正当な権利なのかも知れない。が、同書には次の一節もある。

「本物のナベぶたは二つに割れており、木ネジでつないである。これは順治さんの父、故・淳二郎が落として割ったもの[25]だが、みやげ物屋に並べてあるイ

24　加藤［1980］の口絵には、ベレー帽姿の「十八代の当主・解良順治氏」が、鍋蓋刻字「心月輪」を膝に置いて手を添えているカラー写真が掲載されている。加藤氏によるそこには、小林存氏や玉木禮吉氏の伝える「逸話」以上の説明はない。

25　この鍋蓋のさけ目、割れ目に関しては、渡辺［1996］に、「この鍋蓋には、取っ手にする横木もなければ、表裏の大きさの相違もない。直径四十二センチ、厚さ九ミリの丸い杉板にしかすぎない。／　よく見ると、「輪」の最初の点と「月」の起筆にかけて、横に細い裂け目が見える。これは明らかに板の割れ目で、その傷口からして、あまり古くない時代に落としたか何かして割れ目が入ったものであろう。」（212 頁）とあるが、こ

ミテーションの中には、割れ目までそっくりに作ったものもある。もっとも、最近の良寛ブームにのって作られるイミテーションは粗悪品が多く、順治さんはマユをひそめる。

順治さんの場合は一つ一つをたん念につくり、年に三十枚をつくるのがやっと。「心月輪」の三文字にあらわされた良寛の人間性を、何とか表現しようと苦心しているのである。

そんなイミテーションづくりにとって、悩みは木目の美しい日本杉が高くて手にはいらなくなってきたこと。

「いまアメリカ杉を使っていますが、やはり日本の杉の美しさにはほど遠い」―。

ものにこだわらず、気にいったことはトコトンまでやり抜かないと気がすまない―そんな、良寛に通じる“よき理解者”の心が、順治さんにも生きているようだ。」（132 頁）

ここで、まず注目すべきは、下線を付した部分。当時の解良家の当主、解良淳二郎氏のご子息である解良順治氏を取材した上で記者が記していると思われる一節の中に、問題の「本物」の鍋蓋刻字「心月輪」の割れ目／さけ目は、大正 6 年（1917 年）、あの相馬御風が、「心月輪」を直接見せてもらった当の相手の、解良淳二郎氏が「落として割ったもの」とあることだろう。それが事実だとすれば、相馬御風が初めてそれを手にとって鑑賞した「心月輪」は、もしかしたら、まだ割れ目が入っていなかった可能性もある。だが、「大正七年三月廿八日」に刊行された小柳［1918］に掲載された「心月輪」の写真は、「解良淳二郎氏蔵」とあって、どうやら「さけ目」は既にあるもののようである。相馬御風が解良家を訪問して見たのは「大正六年七月十四日」、微妙なところである。解良家のその伝承では、淳二郎氏が「落として割った」のはいつのことだろうか。鍋蓋刻字「心月輪」の種々あると言われる「逸話」のうち、そのことに反するものは、「でっち上げ」として排除されるべきであろう。また、先の引用から、良寛の貴重な鍋蓋刻字「心月輪」に関しては、その複製品が数多く作られて売

の下線部の記述は、毎日新聞新潟支局［1972］が伝えるこの「逸話」と呼応するものである。さらに渡辺氏は同書に「○円い杉板に、「心月輪」、「良寛書」と書いて、他の人が刻したものである。刻者は不明である。」（215 頁）と明記している。

られているという事実に注目したい[26]。解良順治氏製作のものより遙かに精巧な複製品も製作販売されているということである。そして、「本物」の所有者は、そうした事態を「マユをひそめ」ながらも、黙認している他ない状況でもあるらしい。そして、わたしの言いたいのは、厳密に言えば「本物」と称する解良家の鍋蓋刻字「心月輪」すらもが、良寛の＜真正の墨蹟＞を消して、刻字した「墨蹟の複製品」と呼ぶべきものであるという点である。複製には複製なりの歴史的価値などはあるだろうが、良寛の墨蹟／真筆を論ずる際には、副次的な位置に留め置かれるべきであろう、という点をわれわれは忘れるべきではないのである。特に良寛の場合、「贋作が多い」と繰り返し言われつつも、真作と贋作を厳しく弁別することなく、墨蹟論が展開されているのである。そして銘々が自分の目にかなったお気に入りを相手に、自分の空想をふしだらなまでに語り続けているというのが現状であろう[27]。

26　若き良寛が国仙和尚の下で修行したと言われる岡山県倉敷市の円通寺では、「良寛が日夜生活していた衆寮」が、「良寛堂」と呼ばれている。その「良寛堂の内部」にも、鍋蓋刻字「心月輪」のレプリカであろう、それが壁上懸けられているのを写真から見ることが出来る。いわば良寛のシンボルマークである。加藤［1991］79 頁、北川［1980］「円通寺良寛堂内部と扁額」（口絵）参照のこと。なお、加藤［1991］には、「良寛の代表作の一つに「心月輪」がある。いい伝えによれば、良寛が解良家に遊びにきた時、庭に捨てられた鍋ぶたを見て、「もったいない。ワシが字を書いてやろう」といって、とっさに「心月輪」の三字を書いたという。現に解良家に秘蔵されている。」（113 頁）とある。加藤氏は「いい伝え」と称して、相馬御風ばりの空想物語を勝手に紡いでいるだけではないか。

27　わたしが本攷を書くにあたって参照した資料のうちで最新のものと言い得る小島［2018］には、小島氏が最初に解良家を訪問した時のことが、「解良家を最初に訪問したのは、かなり前のことである。畏友斎藤清君と地蔵堂から西川の堤防の道をゆくと、左手に牧ヶ花の解良家があった。庭には色とりどりの花が咲き、当時の当主順治氏があたたかく迎えてくださった。室内に通されると、すぐ有名な「心月輪」を箱から出され、我々に見せてくださった。そして、この作品にまつわるいくつかのおもしろいエピソードを話してくださった。「心月輪」は丸い杉の板に良寛が書いたものを彫ったもので、まさに名品であった。」（110-111 頁）と記されている。「かなり前のこと」と言うばかりでは、研究者の本とは呼べまい。そこで聞いたという「おもしろいエピソード」が何であったかも記されていないのでは、興ざめである。読者には無縁の「畏友の」名前が書かれてあったとしても、肝腎の新情報は得られないのでは。「鍋蓋」という言葉が使われていないことに何か意味があるのだろうか。だが、小島氏は別の箇所で「実際、良寛には真言宗の修行「月輪観」を念頭に置いて、「心月輪」と書いた鍋蓋を解良叔問に書き与えている。」

むすびにかえて

《全国良寛会総会》は、巨大な「心月輪」のオブジェを飾った壇上で展開される。マイクに向かって喋る人は、そのオブジェを背にして喋ることになるのである。（『良寛だより』第 61 号［1993］3-4 頁参照。「平成五年度全国良寛会吉田総会の盛況」として紹介されているが、その中に「この日会場大広間に設置した椅子は千席。前日会場設営のため集合した吉田町良寛会員の手によってしつらえられた。中央演壇に直径三米ほどの金紙張り「心月輪」は会員グループが心をこめての手造り。会場ロビーにはこの日のために特注制作して頂いたという良寛像（別項）などなど細かい心くばりが参会者の心を和めていた。」（3 頁）とある。）

ここからも言えることは、解良家に伝わる一点ものの鍋蓋刻字「心月輪」は、今や良寛の愛好家たち、いわば良寛事業のシンボルマークのようになっている。筆の立つ『良寛禅師奇話』の作者、第 13 代当主の栄重氏をも輩出している、良寛ゆかりの解良家としては、そのお宝とともに、その鍋蓋刻字「心月輪」についての、華やかな「逸話」が遺されていても少しもおかしくないのである。が、大正年間に活躍した小林存氏や玉木禮吉氏に先立つ時点では逸話としてまとめられることはなかった。誰も関心を示さないようだが、良寛の鍋蓋「心月輪」はいつ鍋蓋刻字「心月輪」となったのか。この点が重要である。いや、とりたてて逸話が生まれなかったということは、逆に、その時点までは、その鍋蓋／鍋蓋刻字「心月輪」は、解良家の内部でもさほど注目されていなかったことを意味するのではないか。そう、解良家に伝わる不思議な鍋蓋／鍋蓋刻字「心月輪」に最初にスポットライトを当てたのは、その最初の逸話の中に登場する、真言宗の僧侶、權田雷斧（1846 ～ 1921）その人かも知れないのである。權田雷斧が、秘かにレプリカを作らせ飾って楽しんでいたところ、時の三浦梧樓／観樹将軍（1846 ～ ? ）の知るところとなり、強要され、拒みきれなくなって遂にそのレプリカを手放した。その顛末が良寛の地元の話題をやや掻き立てた、ということなのではないだろうか。わたしは、今はそのように想像している。そして、三浦觀樹暴れん坊将軍の所蔵に帰すことになった問題のレプリカはその後どうなったのだろうか。毎日新聞新潟支局［1972］の記すところによれば、解良家

（99 頁）と記している。これまで、「書き与えている」というように踏み込んだ記述をしたものがあっただろうか。何か根拠があるのだろうか。

の家宝、鍋蓋刻字「心月輪」は、解良家第 18 代当主順治氏の父君、第 17 代当主淳二郎氏が落として割ってしまったとのことである。權田雷斧が注目した時点では、その鍋蓋／鍋蓋刻字「心月輪」にはさけ目などはなかったと考えたい。良寛が元になる心月輪の三文字を揮毫した時にはさけ目や割れ目はなかったと想像される。どのようにしてその奇妙な鍋蓋「心月輪」が解良家に伝持されことになったのか。その「いわれ」は、相馬御風が『大愚良寛』に記すところを信ずるならば、第 17 代当主も知らないのである。また、第 10 代当主叔問の時代に、良寛が鍋蓋に揮毫したにしても、その上から無残にも刻字したのはいつの時代なのか。やはりどうしても特定出来ないのである。仮に第 13 代当主の栄重氏以前のことであるならば、栄重氏は何かエピソードを書き遺した筈である。鍋蓋／鍋蓋刻字「心月輪」は、ある時期までは台所の片隅に人知れず懸けておかれていたのだろう。教理的に「心月輪」と深く関わりを持つ真言宗の大僧正にまで上りつめることになる地元の傑僧權田雷斧にその解良家秘蔵の地味な不思議なお宝が見出されたればこそ、「汚らしい古鍋蓋」／鍋蓋刻字「心月輪」が、数ある良寛の墨蹟中の無比の名品への道を歩み出したのである[28]。結局、仏教や「心月輪」の半可通で、「名品と褒めそやす」ことだけは得意の良寛事業のプロモーターたちが、＜權田＆三浦＞のそのフィーバー熱気を受け継いだのだと考えたい。小林、玉木氏が伝える以上のことは知れないところに、あの相馬御風の『良寛坊物語』が逸話作りの先鞭をつけたのである。第 18 代当主の順治氏自身が日々せっせとレプリカ（イミテーション！）作りに励んだという[29]。地方毎に良寛愛好家たちによって良寛会が組織され、全国良寛会にまで発展的に組織され、空前の良寛ブームが起こったということである。わたしが本攷「良寛鍋蓋刻字「心月輪」の謎」で確認したかったことは、以上のことでほぼ尽きている。小林、玉木氏が伝える逸話に付加するものは何一つないのである。割れ目やさけ目も良寛が墨書した時点では入っていなかった。写真で見る限り、さけ目は、「輪」の最初の点の中央を通り、「月」の縦線の先端部を切り取る形で走っている。そして割れ目に修復がなされているのである。したがっ

28 「名品」度では圧倒的なものがあるにしても、あの凧文字「天上大風」の華やかな逸話に比して地味過ぎる？小林［1913］や玉木［1917］の伝える逸話だが、鍋蓋→鍋蓋刻字への情報を一切欠いているとはいえ、充分に見事な逸話であるとわたしは考える。

29 順治氏は何故レプリカ作りに精を出すのか。順治氏こそ、自家に伝わる良寛の鍋蓋刻字「心月輪」に誰よりも魅せられた良寛信者であると言い得るのかも知れない。

て、「鍋蓋を作っていたところ、さけ目が入ってしまったので遺棄された、そのものの上に良寛が墨書した」という逸話は成立しないのではないか。權田雷斧が作らせて、三浦将軍の手に帰したそのレプリカをどうにかして探し出せないものだろうか[30]。やはり解良家の現存お宝と同じ＜鍋蓋刻字＞なのかどうか。それも知りたいと思うのである。

さて、わたしは、本攷においても、伊丹末雄氏に励まされるところが大であった。氏の書かれるものの隅々に満ちている厳しい姿勢、それに後押しされることが多かった。氏の口調は常に淀みなく明確である。

「しかるに、理論的に弱い私を助けてくれる、ありがたい味方がいないわけではない。国上山にそれほど遠くない土地、有願ゆかりの白根市に生まれ育ち、幼少のころから良寛や有願の筆跡を味わっていたため、なんとなく彼等の匂いが身にしみついてしまったらしく、新作からのみ伝わる独特の香気が私の胸を打ってくれる、」だから、一見してピンとこないものは偽作であるとみなす。正直なところ、これが私の判別の方法であると言っても、かまうまい。

そうだ、偽作はついに私を感動させない。いくら、がんばっても贋作師にそれだけの力がないことを思えば、彼等もまた気の毒な敗北者ということになるやもしれぬ。心から良寛を慕って筆蹟を習ううちに、その臨模した字が他人に利用されてしまった人物さえ、確かにいるのである。そうして、そういう種類の人に限って、すなおに、まじめに書くから、どうしても良寛と通じる、いい文字が出現しやすい。」（伊丹［1976］149 頁）

伊丹氏は、またこうも言う。

「大げさに表現するなら、贋物師と鑑定家とは、常に真剣勝負を交わすのである。いとも静かな格闘が、いつ果てるともなく続く。実際、研究者たる身をもって、むやみに興奮していたら、おしまいである。故佐藤吉太郎氏が、どんなに真偽むずかしいものも、三日掲げて眺めるならば、きっと、わかるものだ、と述懐

30　わたしは權田雷斧や三浦将軍の著作や事蹟の中に「良寛」の片鱗を探すことをしている。「むづかしい處をむづかしく説くのは、畢竟するに當然のことである。それを徒らに解かり易く聽聞させやうとしたり、近徑に説かうとしたりしては、往々にして其の根旨を誤り、若しくは矛盾を來したりするものである。」（233 頁）といった素敵な文言の鏤められた『雷斧毒語』、權田［1917］には、当然ながら「心月輪」（331 頁）への言及があるが、同郷の人、良寛の鍋蓋「心月輪」はどうしても見つからないのである。

されたことがあったが、まことに至言であると思う[31]。

良寛ゆかりの家に伝わったものなのだから、などという先入観念こそ払拭せられねばならない。偽物はどうせ、そこにあって不思議のなさそうなところに置かれて人をたぶらかそうとするはずで、箱書きも極め書きも、ほとんど、あてにならないこと、上に記したばかりである。」（伊丹［1976］150 頁）

数ある良寛書の絶対の頂点に君臨しているかの解良家の「心月輪」の鍋蓋、この書に関しては、誰もけちをつけないようである。ほめてさえいれば、どこからも苦情が出ないようになっている。解良家の第 13 代当主の栄重氏が書き記したといわれる『良寛禅師奇話』も解良家に代々伝わる良寛の貴重な歴史的資料である。だが、そこにも自家の至宝、その「心月輪」の鍋蓋をめぐる奇話はないのである。その充実した解読と解説を展開させている松本市壽［1988］には、何か言及があるかと見てみたが、「解良家鍋蓋「心月輪」」の写真は掲載されているものの（76 頁）、それへの言及は皆無。その『奇話』を含む、良寛の伝記・口承などを網羅して、良寛和尚の逸話をやさしく面白く解説している

31　こうした伊丹氏の言葉に対して、例えば加藤僖一氏は、佐藤吉太郎氏や相馬御風と共に、良寛事業に多大の貢献をなしたと考えられる日本画家の安田靫彦氏を顕彰する文章の中で、「美術鑑賞の第一は実物を購入すること、第二は美術館、博物館で実物を見ること、第三は精巧な複製を見ること、と言われる。その第一を安田画伯は実行された。／良寛の書はもっともニセモノが多い。鑑賞とは別に真贋を見分ける目は、やはり実物を購入することによって養われる。したがって収集品から逆に、コレクターの目が評価される。」（加藤［2000］93 頁）と言う。「～と言われる。」という典拠の曖昧性、責任の所在のぼかしは、どうしてもいただけない。「真贋を見分ける目」を養う秘訣は、「幸運に恵まれるか」「作品やその精巧な複製品を購入する資金を潤沢に持っているか」のどちらかと言われているようで、なるほどと気が滅入る。伊丹氏も加藤氏も良寛をめぐって鋭く対立していることが見てとれる。だが、詰まるところは、同じ穴の狢か。わたしは伊丹氏が吐き捨てるように書き付けた「ここで誤解を避けておこう。私は決して、いわゆる鑑定家に毒づくつもりなど、ないのである。しょっちゅう実物と対決されるだけあって、概して、そうした方々の眼力はすぐれている。鑑定家のよしとしたものを写真にして「解説」をくっつけ、一見豪華な書物をつくって得々とするインチキ研究者（ある高名な国文学者のことば）に比べたら、確かに天地の差があろうと思う。」（伊丹［1976］147-148 頁）を忘れることが出来ない。わたしに出来たことと言えば、本攷のあちこちに自分自身が決して紡ぎ出すことのないであろうそうしたもう一つの物語の重要な材料を二三鏤めたことだけである。

花園大禅文化研究所［1998］にも、残念ながら、この「心月輪鍋蓋」への言及はないのである。1917年に初めて解良家を訪れて近しく閲覧を許された相馬御風の疑問は、解良家の当時の当主、解良淳二郎氏によっても明らかにされなかった。この解良家の「心月輪」鍋蓋に対して初めて具体的な情報をもたらしたのは、『彌彦神社附國上寺と良寛』、小林存［1913］であり、それを普及させたのは、その土地の住人であり、良寛の心酔者であり、最初の網羅的な『良寛全集』の編纂者である玉木禮吉氏の玉木［1918］である。

結局は良寛事業の上品なプロモーターのお一人と言うべき宮榮二氏が残した数多くの文章のうち、以下の文章を今一度味読してみたい。果たして宮氏[32]は加藤氏と一線を画すことが出来たのだろうか。

「これら脱、衍の事例からいえることは、良寛が書に対するときは、少くとも、手本やメモを傍らにおいて字の誤りをただすことも、字行、字配りを予定して筆を下すこともしなかったことは確かであろう。誰に見せるために書くでもない、自分の為に書く場合が多かったのであろう。自分の為というより、ただ筆にひかれ、書芸の境にさまようことが天成であったものと思われる。

誰の為でもない書ということは何物にも拘そくされていないことであり、紙に対するときは紙、板に対するときは板に、扇面に対するときは扇面と、良寛の書は常に対象と一体となって、不思議な造形美を作り出した。本図録中の「一二三、いろは」鍋蓋「心月輪」、ふくべの漆書や有名な「天上大風」の凧字など、いずれも書がものになりきった例であろう。書がものになりきった、というのは、書かれた墨の芸だけの問題ではなく、書くことによって、書かれていない部分、すなわち素材そのものが活かされるはたらきであって、これは良寛の人間性と深くかかわるものである。

人に書を需められて揮毫することをきらった例証は、歌にも詩にも書簡にも逸話にも記されているから、そのような機会がやたらに多かったのであろう。

書は人を表わすというが、確かに良寛の書は、その客観性よりは主観性において、その論理性よりは、その情意性において、はるかに人の胸奥に迫りくる偉大な芸術である。

既に生前より偽筆の出現していたことが明らかなように、幕末から明治、大

32　初々しい宮榮二氏については、金沢［2016］394頁註54で好意的に紹介している。

正、昭和とこれほど長く、はげしく偽墨の横行している例もめずらしい。それは良寛書が日本人の心にもっとも訴える魅力をもっている為ではあるが、また一般に良寛耽溺の安易さにも起因するといえよう。真偽の判別は、他の墨蹟とはちがった物差があり、容易ではない。良寛の書はやはり心と形、余白と墨色との緊密な調和の美であって、そこにはいささかの作意も、不自然もゆるされない。それを究めるのは、やはり観る人の心眼であって、それ以外に偽物の厄をまぬがれる方法はないというべきであろう。」（宮［1978］16-17 頁）

最後に「高田の K[33]」、北川省一氏の含蓄の深い言葉を引いて擱筆することにする。確かに北川氏のこの言葉は、良寛の書をめぐる一つの局面をシニカルに指摘したものではあるが、果たしていかがなものか。個人的な好みや楽しみと良寛書の真贋問題とはまったくの別物である。驚くほど多数の良寛本を刊行している北川氏は、「素人は真贋など気にせず自分の好きなように良寛の書を楽しめばいい」とまで言わんとしているかのようであり、決して気持ちのいいものではない[34]。良寛の書の研究家、専門家と称する人々の中に蔓延するこの姿勢

33　わたしは、自分が編集している『インド論理学研究』誌第 10 号（2017 年 11 月）の「編集後記」で、この「高田の K」考を展開した。

34　良寛に対してはずぶの素人から出発した相馬御風も、アッというまに良寛書の有数のコレクターに、そしてアッというまに良寛書の大権威となるのである。相馬［1936］所収の「良寛墨蹟断片」中に「又時に良寛書とか沙門良寛とかいつたやうな落款のある偽筆を示して、／「この書は私にはたまらなく好きですが、これは良寛さまの眞筆でせうか」／といふやうな奇問を發する人もある。私はさうした人に向つて答へる。／「此書をあなたがたまらなく好きだとお思ひになるなら、それで充分ぢやありませんか。いかに眞筆でも嫌ひなものは愛賞されはしないでせう。要は好き嫌ひにあるので、眞偽などは第二の問題ぢやありませんか。それともあなたが今この書をたまらなくお好きであつても、私が萬一これが偽筆ですと云つたら忽ちにしてお嫌ひになるのですか。それでは甚だ困ります。ですから私はあなたがたまらなくお好きだといふお心持を尊重して、眞偽の判定は申さずに置きませう。たまらなくお好きだ・・・・・・それ以上何の力を添へる必要がありませう。それで結構ではありませんか。又それ以上何がありませう」」（273-274 頁）とあるものなど、北川氏の言いぐさと同類である。自分の愛蔵している良寛書の真偽を尋ねている人に、そのような言いぐさで偽筆であることを伝えたと御風は言うのだろうか。一見して偽筆と知った御風の取るべき態度は、その理由をしっかり示してその旨をはっきりと伝えることではなかったか。御風は先の文に続けて以下のように記す。「さうかと思ふと、文句はさっぱし讀めないが、良寛さまの書を見てゐると、その全體の繪畫的な美、その線のリズム、その墨の濃淡の配置、その紙面の取扱ひ方、それらの美しさに魅せら

はやはり断固糾弾すべきものと考える。

「いわゆる良寛書は、このようにして、真贋併せ呑んで、バラエティを増幅しながら、年ごとに膨れ上ってゆくであろう。万人に愛され、万人によって書か

れてしまふ。その點で良寛さまの書が好きだとあからさまに告白する人がある。私はこの種の人々を寧ろ尊敬するのである。／　先頃も人及び芸術家としての良寛さまに非常な愛着を感じたあまり、せいゞゝ各方面から良寛さまを研究して、歐米人にその輪郭なりとも紹介したいと意氣込んでゐるドイツ人フィッシャー君（新潟高等學校教師）が私に向つて、／「良寛さまの字、一つゝゝ見るとあまりよく感じない。しかし良寛さまの字の書いてある紙一枚を全體として眺めてゐるとピクチャレスクで美しい。あの墨の色の調子を見てゐるだけでも非常にいゝ氣持になる。」と語つた。／　私はそれに感心した。せめてそこまで良寛さまの書の美が感じられたとすれば、彼は決して凡眼者流でないと私はつくゞゝ感心したのであつた。」（274-275 頁）こういう言いぐさに接すると、わたしはつい笑ってしまう。良寛の専門家としての御風はどうしても尊敬できないのである。加藤僖一氏は、御風の学風を擁護して、「黒白の結論をはっきりさせるより、「真でもあり、真でもない。」真実がありうるのである。」（加藤［1979a］196 頁）と言う。本攷を閉じるにあたって、この加藤氏が自身の著作の＜あとがき＞に記している文章を紹介しておくべきかと思う。それは『良寛の名筆』、加藤［1984］のあとがきであるが、問題にしたいのは、それではなく、「増刷発行の折」と断りを入れた、加藤［1997］のあとがき、つまりあとがきの改訂版である。基本は変わらないが、若干の箇所が増広されている。その増広部である。「本書は、本書そのものとして見ていただくこと、もとよりであるが、本書のベースには、拙編『良寛の書』全五巻十冊（野島出版・大修館書店刊）があることもいなめない。同書はＢ４判千百頁（本冊五百頁、解説編六百頁）に及ぶ、文字通り空前の豪華本。おそらく歴史に残る書物であろう。そうした背景をもって本書は生まれているから、自分でいうのはおかしいが、内容的には、かなり濃密な形になっているのではなかろうか。／　『良寛の書』は定価十三万八千円という高価にもかかわらず、わずか半年ほどで、アッというまに売り切れてしまった。今ではもう入手不可能な古典、といった存在。／　数年前、出版社から復刻の要請を受けた時、「ウイ」といえば、ン百万円の印税が入るのを承知の上で、おことわりした。それは当時（昭和四十年代）自分が書家である立場から、書道の独自性を強く意識しており、良寛の書を研究する場合にも、文学や宗教からことさら切り離し、書そのものを純粋に見ようとしていた。したがって、若気の旧稿にのこのこ出てこられては‥‥‥、と思ったからである。」（237 頁）わたしは、こんな驚天動地の＜あとがき＞を読んだことがない。加藤氏は、ここで何が言いたいのだろうか。また、加藤氏は「安易に良寛ブームに乗っているだけでなく、本当によいものを、私達は守り育ててゆかなければならない。」（238 頁）と言い、「道元禅師の教えにしたがい、私は今日も、良寛さまが書かれた「般若心経」を写すことによって、ただちに良寛さまにお値いするのである。」と＜あとがき＞を結んでいる。何というあとがきだろうか。

れるであろう。真の古典の生命力、永遠の生長とは、そういうものである。生ま身の釈迦自身の説法はわずかだったであろうが、「如是我聞」の経典は蔵一杯の大蔵経と成っている。どれが本物で、どれが偽物だという詮義立ては無用である。良寛も言っているように、経典に親疎優劣はないのだ。好きな経を読誦して、それで救われさえすればよいのだ。良寛の書だって、手に入れたものが楽しめれば、それでいいではないか。真贋を見分ける眼力もないくせに、本物でなければならぬと言うのも、おかしなものだ。」（北川［1980］456 頁）

【略号・参考文献（抄）】

『良寛だより』（全国良寛会会報）創刊号（1978 年 7 月）～
『良寛 [35]』（新潟県良寛会）創刊号（1982 年 5 月）～

伊丹末雄
［1976］：著『書人 良寛―その書風と生涯―』国書刊行会
［1985］：「良寛研究者に伝えたいこと―宮先生の古稀を祝いつつ―」『宮榮二先生古稀記念論集　越佐の歴史と文化』考古堂書店
伊藤仁太郎
［1935］：著『伊藤痴遊 怪傑傳』平凡社
大島花束（清作）
［1958］：編『良寛全集』良寛全集刊行会・新元社
岡村圭真
［1992］：「心月輪まんだら考」→「日本学」企画室［1992］
加藤僖一
［1979a］：著『良寛と相馬御風』＜考古堂ブックス①＞考古堂書店
［1979b］：著『良寛の書と風土』＜考古堂ブックス②＞考古堂書店
［1979d］：著『良寛と貞心尼』考古堂書店
［1979c］：著『書のすすめ』玉川大学出版部
［1980］：著『良寛と禅師奇話』考古堂書店
［1984］：編著『良寛の名筆』考古堂書店

35 『良寛だより』『良寛』の二誌に関しては、わたしもその実情を知るところはないが、『良寛だより』80 号（1998 年 4 月）には、「斎藤 よく「良寛だより」と一般市販の「良寛」誌とを合併して刊行したらというお話をお聞きするのですが、「良寛だより」は会員間の情報連絡的ないわゆる機関紙であり、「良寛」誌はやや専門性を帯びていて読者の対象が違い編集方針も違うので、単純にはゆかぬかと思います。・・・」（16 頁）、「斎藤 会員は一、三〇〇名ほどですか、・・・二、四〇〇部ほど印刷しています。」（同）とあって、驚くばかりだ。

［1987］：「浮生」『良寛』第 11 号
［1991］：著『良寛の書と生涯』考古堂書店
［1997］：編著『良寛の名筆』（第 6 版）考古堂書店
［1999］：記念講演「良寛の「心月輪」」『良寛だより』第 86 号
［2000］：「良寛を恋うる人びと／安田靫彦　良寛堂に表徴された敬慕のこころ」『歴史と旅』12 月号＜総力特集 良寛 僧にあらず 俗にあらず＞
［2005］：「記念講演　良寛の書の魅力について」『良寛』第 48 号
金沢篤
［2016］：「伊丹末雄と堀口大學―或る有らざらん格言をめぐる本の旅―」『駒澤大学仏教学部論集』第 47 号
［2018］：「良寛の長歌「月の兎」」『駒澤大学仏教文学研究』第 21 号
亀山弘義
［1985］：「鍋蓋「心月輪」と月輪観に就いて」『越佐の歴史と文化―宮榮二先生古稀記念論集』考古堂書店
北川省一
［1980］：著『良寛―その大愚の生涯―』東京白川書院
栗田勇
［2005］：著『良寛』春秋社
黄田光
［2001］：著『心月輪―画家 榎倉省吾伝』朝日新聞社
小島正芳
［1987］：著『良寛の書の世界』恒文社
［2018］：著『良寛―その人と書＜五合庵時代＞』考古堂書店
小杉大雅堂
［1939］：編『良寛和尚墨跡』芸艸堂出版部
小林存
［1913］：『彌彦神社附國上と良寛』萬松堂支店
小林新一・宮栄二
［1968］：著『良寛のふるさと』中日新聞東京本社東京新聞出版局
小松正衛
［1985］：著『良寛さま』＜カラーブックス 691 ＞保育社
小柳市造
［1918］：編『良寛墨蹟』良寛會
權田雷斧
［1917］：著『雷斧毒語』良書刊行會
佐藤吉太郎（耐雪）（1876 ～ 1960）
［1928/1929］：編『良寛遺墨集』（一巻本）第一書房
相馬御風（1883 ～ 1950）
［1918］：著『大愚良寛』春陽堂
［1919］：著『良寛和尚遺墨集』春陽堂

［1928］：著『良寛坊物語』春秋社
［1930］：著『良寛さま』実業之日本社
［1935］：著『良寛百考』厚生閣書店
［1935］：著『續良寛さま』実業之日本社
［1936］：著『砂上點描　相馬御風随筆全集第七巻』厚生閣書店
［1939］：著『良寛物語』春秋社
［1941］：著『良寛を語る』博文館
［1942］：著『丘に立ちて』人文書院
［1948］：著『大愚良寛』春陽堂
谷川敏朗
［1975］：編著『良寛論考』新潟日報事業社
［1983］：「良寛に魅せられた人びと　＜権田雷斧＞」『良寛』第 4 号
［1984］：著『良寛の生涯と逸話』恒文社
［1985］：著『良寛の旅』恒文社
［1998］：著『良寛の逸話』恒文社
玉木禮吉
［1918//1994］：編著『良寛全集』牧野出版
東郷豊治（1905 ～ 1969）
［1959］：編著『良寛全集』（上・下）東京創元社
［1970］：著『新修 良寛』東京創元社
中野孝次
［1991］：「良寛―没絃琴のしらべ」『季刊　墨スペシャル　第 6 号　良寛入門』芸術新聞社
［1995b］：文「写真紀行　良寛書の原風景」『墨』第 115 号＜特集 私の良寛＞
［1997］：著『良寛に会う旅』春秋社
［2000］：著『風の良寛』集英社
西郡久吾
［1914］：編述『北越偉人　沙門良寛全傳』目黒書店
西越郷土誌編纂會
［1926］：編『小木の城山』西越村教育會
「日本学」企画室
［1992］：編『良寛まんだら考』名著刊行会
原田勘平（1987 ～ 1974）
［1974］：著『良寛雑話』（藤田正夫編）北洋印刷
毎日新聞新潟支局
［1972］：編『いまに生きる良寛』新潟県文化財保護連盟
松本市壽
［1988］：著『野の良寛―『良寛禪師奇話』を読む』未來社
宮榮二
［1978］：「良寛の人間性とその書芸」『’78 日本書芸院特別展観 良寛』

［1979a］：「良寛逸話考＜県良寛会例会講話要旨＞」『良寛だより』第 5 号
［1979b］：著『文人書譜 6　良寛』淡交社
［1982］：「良寛遺墨探訪」『良寛』第 2 号
［1983］：著『良寛墨蹟探訪』象山社
［1985］：編著『良寛研究論集』象山社
［1988］：著『良寛　その生涯と書』名著刊行会
渡辺秀英
［1972］：著『いしぶみ良寛』考古堂出版
［1974/1985］：校註『校註　大愚良寛』考古堂書店
［1978］：著『増補版　いしぶみ良寛』考古堂出版
［1985］：著『増補第三版　いしぶみ良寛』考古堂書店
［1991］：「良寛いしぶみ巡り（十八）分水町国上 本覚院春禽詩碑」『良寛』第 19 号
　→ 渡辺［1997］
［1996］：著『良寛鑑賞』象山社
［1997］：著『いしぶみ良寛　続編』考古堂書店

〈キーワード〉良寛、墨蹟、心月輪、複製、真贋、相馬御風